

Q1 2016年 vs.2017年の増減益要因を教えてください。

A1 16年は約50～60億円の一時利益があり、また原燃材料価格上昇もマイナス要因となるため、17年は実質的に200億円の増益が必要となると認識しています。もっとも利益貢献が大きいのは化学品のクロール・アルカリ事業です。16年はインドネシアでの増設が上期は設備がフル稼働ではなくあまり利益貢献せずに、下期から貢献しました。17年は増設効果が通年で寄与する見込みです。足元では苛性も含めたスプレッドが良化しており、またその状況でビニタイ社の連結効果も見込めます。また、フッ素事業の新冷媒等の新製品の出荷増を見込んでいます。

次に利益貢献が大きいのはガラスです。建築用ガラスは好調が続いていて、自動車用ガラスは数量が出ています。16年は設備トラブル等でコスト高となっていた面もありましたが、すでに解消してきており17年の増益要因になります。

電子は液晶用ガラスが16年1Qは流通在庫が溜まり低稼働でしたが、17年は高稼働が続いていて、数量は増加する見込みのため、数量増とコストダウンで価格下落の影響をカバーしたいと考えています。電子部材の製品は16年は期前半に出荷数量が伸びませんでした。このトレンドは解消しており、1Qも高い出荷量の見込みです。以上から、電子セグメント全体としては減益に歯止めをかけたいと考えています。

Q2 好調な塩ビ市況はいつまで続くか見ていますか？また、ヨーロッパの建築用ガラスの市況について、今後の見通しは？

A2 塩ビは東南アジアの需要が旺盛であり、インドの高額紙幣廃止による影響は限定的と見ています。東南アジアの経済成長は続いているので、順調に推移する見込みです。

欧州は季節性による出荷減の影響や欧州の原発停止に伴う天然ガス価格の上昇も一時的にはありますが、需給バランスは改善しているので今後も大きな心配はしていません。

Q3 足元の事業環境を見渡して不安要素はありますか？

A3 ガラス事業やクロール・アルカリ事業は市況の影響を受けます。クロール・アルカリ事業への投資を増やしているため、市況によって業績が振れるリスクがあると認識しています。全く影響を受けないことは難しいですが、市況の影響を抑えるために、ライフサイエンス、エレクトロニクス、モビリティなどの戦略事業を強化していく考えです。

Q4 CMCバイオロジックス社は買収金額が600億円と大きいですが、今後の売上貢献はどのくらいでしょうか？

A4 個別会社の売上高は申し上げられませんが、合成医農薬とバイオ医薬を合わせたライフサイエンス事業全体の目標は、2025年で売上高1000億円を掲げています。

以上